本間邦則評議員の御逝去を悼む

蒲原　宏

昭和六十年春頃から下腹部に異常があり、その後、六十一年春に突然の下血、三月に日本歯科大附属病院で結腸癌の診断で根治手術を受け、経過も良好であった。昭和六十二年秋に肺転移が発見されながら六十三年五月二十八・二十九日の第八十九回日本医史学会総会副会長として実質的な運営に奔走された。その後は、入退院を繰り返されながら、診療、講義、学会発表、執筆を精力的にこなされ、また中原泉日本歯科大新潟歯学部長の片腕として、同大学の「医の博物館」の設立に情熱を傾け、平成元年九月四日開館にこぎつけるに至った。しかし、この頃から病勢は徐々に悪化し、肺転移の他に肝転移も発現し、翌二年七月十一日に最後の入院となり、十月十二日午前七時五十分眠るが如く逝かれた。

本間邦則評議員

逝去の前日まで、英語論文の執筆を続け、十月二十七日開催の新潟支部例会について病床から事務担当の泉田氏に指示されていた。明朗で、心くばりが細やかな、誠実な人柄で、行動力のある、新潟支部の名幹事を失なった事は返すがえすも残念なことである。御葬儀は十月十六日郷里の新潟県岩船郡山北町府屋の常楽寺で行われ、先祖の墓地に葬られた。法号は碧雲良邦居士という。昭和七年一月二十一日の生れであるから享年五十八歳。お子

様の無い郁子未亡人の寂寥は如何ばかりかと察するに余りある。

氏が日本医史学会で最初の研究発表をされたのは、昭和四十三年五月の新潟市での第六十九回総会の「新潟県北部の歯の民俗について」である。山形県との県境で開業歯科医師として地域患者の診療と住民の口腔衛生の指導者として活躍されながら、日本歯科大学新潟歯学部歯科医学史料室嘱託として、歯科関係の浮世絵および、歯科学史関係資料の蒐集、充実に尽力しておられた。その後、母校講師、新潟大学歯学部の講師として、歯科医学史の教育を病没前まで担当され、その情熱に満ちた誠実で該博な講義は学生たちを魅了した。

日本医史学会評議員、日本歯科医史学会理事として、また、ロンドンでの第二十三回国際医史学会（一九七二）以後、病いに倒れられるまで毎回講演発表をする常連で、大矢全節博士亡き後、国際的にも貴重な存在であった。

郷里の山北町では、本間歯科医院というよりも「高浜屋」と呼ぶ方が誰れにでも知られるほどの旧家の生れである。それで代々の収蔵書画の影響もあって、歯科に関する多様の浮世絵資料を集め、これを母校に寄贈されたことが、博物館法による全国で最初の「医の博物館」創立の核ともなり、原動力になったのである。氏の行動と人柄には、氏のために動かざるを得ぬような不思議な魅力があった。

中原泉日本歯科大学新潟歯学部長は「まさに類いまれなる医療人である。氏は朝に畑を耕し、昼に患者を診、夜に筆を執るという。新潟辺境の府屋から毎週本学の史料室に通いつめ、毎月欠かさず歯科医史学会例会に上京し、演題をひっさげて国際医史学会に飛んでいく。その独特のパーソナリティーから異国の同好との交遊は広い。（中略）多芸多才な医療人の世界とはいえ、野に恐るべき人物がいるものである」と氏を評している。抱容力と見識のある中原部長があってこそ、はじめて本間博士の縦横な医史学研究の活動があり得たのである。まさに「伯楽の一顧を得た」のであり、本間博士は以て瞑すべしであろう。

新潟県立村上高等学校をへて昭和三十一年日本歯科大学卒業以後病没までの主たる医史学的研究業績を記して哀惜の言

葉に代え、心からご冥福をお祈りする次第である。

単行本

(一)『歯学史概説』一九七一、医歯薬出版。
(二)『浮世絵にみる歯科風俗史』中原　泉・新藤恵久・本間邦則、一九七八、医歯薬出版。
(三) Manners and customs of dentistry in Ukiyoe. 一九八〇、医歯薬出版〔(二)の英語訳本〕。
(四)『歯科の歴史』ホフマン・アクステルム原著、本間邦則訳、一九八五、クインテッセンス。
(五)『新潟県の医学の歴史をたずねて』蒲原　宏・本間邦則、一九八八、西村書店。

論文

(一)「新潟県北部の歯の民俗について」『日本医史学雑誌』一四巻一号、一九六八。
(二)「明治時代の歯学について」『日本歯科評論』三五四号、一九七二。
(三)「野口英世と石塚三郎」『日本歯科医史学会会誌』一巻一号、一九七三。
(四)「第二三回国際医史学会総会に出席して」同一巻二号、一九七三。
(五)「日本の歯学略史」『日本歯科大学講義資料』一九七三。
(六)「中原市五郎と咬合器」『日本歯科医師会雑誌』二五巻一〇号、一九七三。
(七)「第二五回国際医史学会総会に出席して」『日本歯科医史学会会誌』三巻一号、一九七四。
(八)「都内の歯学史散歩（上野公園）」同三巻二号、一九七五。
(九)「国際医史学会の旅」同五巻二号、一九七七。
(一〇)「義歯に関する最古の文献」『日本歯科大学紀要』一一号、一九八二。
(一一)「日本における口腔治療の歴史」THE QUINTESSENCE 一巻八号、一九八二。
(一二)「近代歯科医学の先駆者たち」同二巻一号、一九八三。
(一三)「歯科医術と口腔衛生の発展——日本の歯科文化史（英・和文）」同二巻一一号、一九八三。

(一四)「ハッチンソンの歯について」『日本歯科医史学会会誌』一〇巻二号、一九八三。
(一五)「歯の名称の変遷について」『歯界展望』六四巻三号、一九八四。
(一六)「歯の解剖用語に冠せられた研究者名について」『日本歯科医史学会会誌』一二巻三号、一九八六。
(一七)「歯の硬組織の用語について」同一二巻四号一九八六。
(一八)「ゲーテの顎間骨」同。
(一九)「ゲーテの友人医師たち」同一三巻四号、一九八七。
(二〇)「消毒法の歴史について（Ⅰ）」同一四巻四号、一九八八。
(二一)「消毒法の歴史について（Ⅱ）」同一五巻三号、一九八九。
(二二)「歯科臨床における注射法の導入について」同一六巻三号、一九九〇。
(二三) Deutsche Lehrer, die zur japanischen Medizin beitrugen. Museum of the Nippon Dental Univ. Niigata, 1983.
(二四) Forerunners of dental surgery in Japan. Museum of the Nippon Dental Univ. Niigata, 1983.
(二五) Tufted Toothpicks and Teeth Blackening Customs in Ukiyoe.（中原泉共著）Bulletin of the History of Dentistry, vol. 34, no. 2, Oct. 1986.

（日本医史学会常任理事）